

2024年9月15日 スチュワードシップ月間③

説教題「新しいぶどう酒は新しい革袋に」マルコ福音書2章18～22節、14章26節

主任牧師 加藤 誠

「だれも、新しいぶどう酒を古い革袋にいれたりほしくない。…新しいぶどう酒は新しい革袋に入れるものだ」(マルコ福音書2章22節)

スチュワードシップの三回目「主日礼拝の喜び」について聖書から聴いていきます。そもそも礼拝とはなんでしょうか。礼拝は「この世界をわたしと共に歩もう！」という神の招きです。天地創造の初め、神はすべての創造の業を終えて七日目を安息日とされました。天地を造られた神は「創造に込めたわたしの祈りを覚えて、わたしと共に歩んでほしい」と、私たちがすべての働きの手を休めて神の語りかけに集中する。そのために定められた礼拝の日が安息日です。

ユダヤ教は「第七の日」（土曜日）を安息日として大切に守りましたが、クリスチャンたちはイエス・キリストが復活した「週の最初の日」（日曜日）を「主の日」として礼拝する日としました。「主の日」とは「主なる神が圧倒的な力をもって、この世界に介入される日」のことですが、新約聖書の人びとはイエス・キリストの十字架の復活の出来事を「主の日」と受け止めました。すなわち主イエスの復活において私たち人間の罪が裁かれ、救われ、神の愛と正義がはっきりと示された。この神の愛と恵みを喜び礼拝する日として日曜日を「主の日」と呼ぶようになったのです。

ユダヤ教の中に生まれたキリスト教でしたが、日曜日を「主の日」としたことで新しい歩みを始めます。使徒言行録にはクリスチャンがユダヤ教徒から厳しい迫害を受けていますが、それは十字架で処刑されたイエスを復活のメシアと語り始め、日曜日を「主の日」と勝手に変えて、聖なる安息日をケガしたからでした。しかしクリスチャンは「主の日」である日曜日に「パン裂き」（主の晩餐式）のため集いました（使徒20：1以降参照）。十字架の主イエスを通して与えられた神の真実の愛を大切に受けて、この世界を「神と共に歩みたい」と日曜日の「主日礼拝」を始めたのです。

この「主日礼拝の恵み」という視点で、今朝のマルコ2章を読んでみたいのです。

ここで主イエスはバプテスマのヨハネの弟子やファリサイ派の人びとによる「断食問答」をきっかけに「新しいぶどう酒は新しい革袋に入れるべきだ」と語られた箇所です。「イエス・キリストという新しいぶどう酒、喜びの福音を受けた今、これまでのユダヤ教という革袋とは違う新しい革袋が求められているのだ」という意味で一般には理解されている箇所ですが、今朝は「新しいぶどう酒」に込められた意味をもう少し掘り下げてみたいのです。

今回「ブドウ酒の作り方」を調べてみました。まずブドウの実を水で洗いますが、ブドウの皮についている天然の酵母菌を洗い落してしまわないよう、さっと洗います。

そしてタッパーの中で実をつぶして、蓋を完全には閉めずに放置します。すると日が経つにつれて発酵し始め、ブドウが二倍近くに膨らみ水分をだしていくのです。一週間たつとアルコール度が約1%になるので、それ以上は「法律違反！」と書いてありました。この説明を読みながら「なるほど！」と気づかされたことがあります。

一つはぶどう酒の発酵は「無菌状態」ではできない。美味しいぶどう酒に発酵させるためには酵母菌をはじめ空中の雑菌が必要だということです。ファリサイ派の人びとは「礼拝する資格のない者」を排除して、律法をきちんと守る「資格ある者だけの純粋な礼拝」を目指したのですが、主イエスは「自分は礼拝資格があると神の前で胸を張れるものが一人でもいるのか？未熟さや愚かさを抱えた者が神の恵みと赦しに救い上げられ、神の国に招かれている喜びをささげる礼拝と一緒にささげていこう！」と招かれたのでした。弱さや至らなさを抱えた、さまざまな人がいて、神の国の福音は豊かに発酵し、美味しいぶどう酒にされていくのです。

二つ目に、発酵途中の新しいぶどう酒を入れる革袋にはしなやかさが求められるということです。革袋とは水筒のようなもので、当時は発酵が十分でない状態の新しいぶどう酒も売り買いされていました。その新しいぶどう酒は革袋の中でどんどん発酵し続けてガスを出し膨らむので、古くなって固くなった革袋では破けてしまうのです。この新しいぶどう酒を受ける革袋、人びととの出会いの中で発酵し続ける神の国の福音を受ける革袋とは、私たち一人ひとりであり、教会のことです。「福音はこうあるべき」と決めてかかるのではなく、新しい人々との出会いの中で、豊かに発酵し、味が変わって熟成していく福音を喜ぶことのできる、しなやかな信仰が、神の国では求められるのだよと主イエスは教えられたのです。

これらを踏まえて、スチュワードシップとしての神の恵みにふさわしい礼拝を思い巡らすとき、「礼拝は主日で終わるのではなく、主日から始まる」ことを示されます。なぜ「週の初めの日」の礼拝なのか。それは新しい一週間を新しいぶどう酒であるイエス・キリストと共に歩むためです。五千人の人びとと五つのパンと二匹の魚を手にして主イエスが神への賛美と祈りをささげられた時、世界は変えられました。「これしかない。こんなもの何の役に立つか？」ではなく、「主よ、私たちの手の中にあるあなたの恵みを感謝します！」と祈る者に変えられたのです。最後の晩餐の後、主イエスたちは「一同は賛美の歌をうたってから、オリーブ山に向かった」とあります（マルコ 14：26）。この世界を覆っている暗闇の中を、しかし主イエスと弟子たちは賛美をしながら歩まれた。この嵐の中を歩む信仰、祈り、賛美をいただいていくのが毎週の主日礼拝です。この世界に来られた「新しいぶどう酒」であるイエス・キリストとその福音を喜びつつ、毎週日曜日の主日礼拝を大切に選び取り、いろな人びととの出会いの中で豊かに発酵していく交わりを喜ぶ教会を共に形づくっていきましょう。